

令和5年度 道徳教育の抜本的改善・充実に係る事業 「特色ある道徳教育支援事業」 研究指定校の取組



【特色ある道徳教育支援事業】

「特色ある道徳教育支援事業」は、研究校を指定（2年間）して道徳教育の内容の重点化を図った研究を全教育活動において進めるものです。研究校では、道徳教育推進教師を中心とした校内体制の充実や道徳科における「考え、議論する道徳」の実践に向けた指導方法の工夫改善、児童生徒の感性に訴える魅力的な道徳教育用教材の開発と活用など、創意工夫を生かした特色ある道徳教育を推進するための実践研究を行うこととしています。

令和5年度は、次の2校で実践を行いました。

・上三川町立上三川中学校（2年目）

・高根沢町立中央小学校（1年目）

このリーフレットでは、本事業に協力いただいた各学校での取組や成果・課題等について紹介しています。各学校における道徳教育や道徳科の授業のより一層の充実に向け、実践校での事例を御活用ください。

* 本リーフレットでは、「特別の教科 道徳」を「道徳科」と表記します。

令和6（2024）年3月
栃木県教育委員会

◇学校教育目標

『共に磨き合い、高め合う学校』

- ・自ら学び、物事に粘り強く取り組む生徒
- ・自ら考え、主体的に活動できる生徒
- ・人と関わり、自己を高める生徒

◇学校の道徳教育の目標

自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として、他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性を養う。

- (1) 自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考える力を育てる。
- (2) 人間としての生き方についての考えを深める。
- (3) 道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

◇学校の道徳教育の重点(重点内容項目)

本校の特色及び教員・生徒アンケートや保護者学校評価の結果から、「B(6)思いやり、感謝」、「C(10)遵法精神、公德心」、「C(16)郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」を重点内容項目に設定した。

<研究の実際>

◇研究を始める前の道徳教育及び道徳科授業の現状と課題等

- ・ 「共に磨き合い、高め合う学校」の実現を目指し、道徳科では「考え、議論する道徳」を目指すも、「意見を言うだけの道徳」、「どこか他人の道徳」となっていた。

◇研究を進めるに当たり、工夫したこと

- ・ 最初に育てたい生徒像を明確にし、全教職員で共有した。
- ・ それぞれの研究課題(1)～(3)を達成するために、以下のような手立てを考え、実行するための組織づくりをした(図①)。
- ・ 研修の際は、研究の手順や方向性を共通理解するために「研究のロードマップ(図②)」を作り、全体に示した。

◇研究課題

研究課題(1) 学校の教育課題を踏まえた道徳教育の内容の重点化

→教員・生徒アンケートや学校評価の結果を参考にした内容の重点化を検討。カリキュラムマネジメントの検討。

研究課題(2) 道徳科の指導の創意工夫

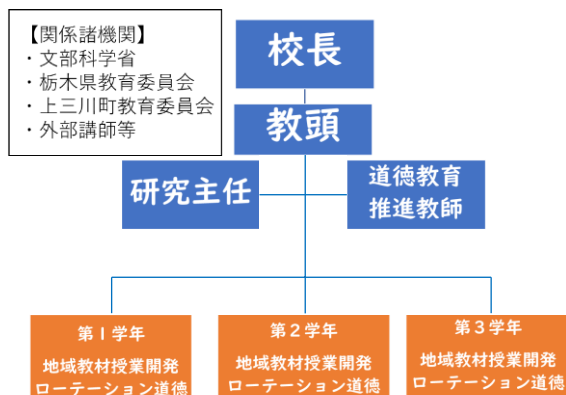
→手立て①授業力向上(ローテーション道徳による授業内容の改善)

→手立て②手法の獲得(「トリオ学習」の導入)

研究課題(3) 指導体制や異校種、家庭や地域社会との連携体制の充実

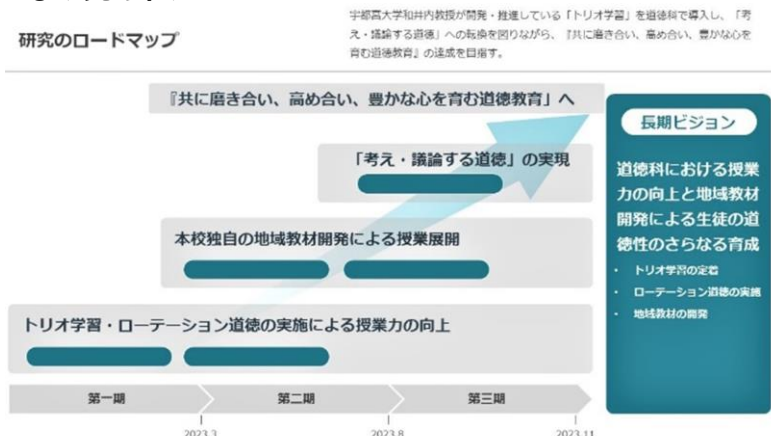
→手立て③地域教材の研究(学校外の人的資源の活用・地域の偉人の教材化)

◇組織体制



図①

◇主な研究の経過



図②

<効果的だった取組等>

研究課題（２） 道徳科の指導の創意工夫

<手立て①> ローテーション授業の実施

○ 教職員が交代で学年の学級を回って道徳科の授業を行う取組（いわゆる「ローテーション授業」）を行った。自分の専門教科など、得意分野に引きつけて道徳科の授業を展開し、何度も同じ教材で授業を行うことにより、指導力の向上につながることができた。また、生徒一人一人が自分の感じ方や考え方を伸び伸びと表現することの大切さを全教職員で再認識することができた。

〈先生方の声〉

- ・ 生徒の反応を見て発問を代えるなど、回数を重ねる毎に授業内容を深化させることができた。
- ・ 担任として学級の生徒の新たな側面を知り、生徒理解につながった。
- ・ チームとして生徒に関わることで、授業の展開や発問についての悩みを共有し、よりよい授業に向けて取り組むことができるようになった。
- ・ 同じ教材で複数回授業を実施することで、発問や問い返しの幅が広がり、多様な考えを引き出すことができた。



<ローテーション授業の記録>

ローテーション道徳
 ○主題名 勤労 ○教材名 「段ボールベッドへの思い」
 授業者 _____

実施日	① 10/17	② 10/24	③ 11/7	④ 11/14
実施学級	2年 1組	2年 2組	2年 3組	2年 4組
学習形態	一斉・グループ・トリオ	一斉・グループ・トリオ	一斉・グループ・トリオ	一斉・グループ・トリオ

○展開

	学習活動（○基本発問 ◎中心発問）	学習形態 及び活用ツール	〈変更・改善点〉
導入	1 ○「働くこと」のイメージは？	トリオ	
	2 教材を読み、話合う。 「この会社はどうして段ボールベッドをつくっ		

○展開
 ① ② ③ ④
 ⑤ ⑥ ⑦ ⑧
 ⑨ ⑩ ⑪ ⑫
 ⑬ ⑭ ⑮ ⑯
 ⑰ ⑱ ⑲ ⑳
 ㉑ ㉒ ㉓ ㉔
 ㉕ ㉖ ㉗ ㉘
 ㉙ ㉚ ㉛ ㉜
 ㉝ ㉞ ㉟ ㊱
 ㊲ ㊳ ㊴ ㊵
 ㊶ ㊷ ㊸ ㊹
 ㊺ ㊻ ㊼ ㊽
 ㊾ ㊿

★ローテーション道徳について
 〈メリット〉
 1 回目、2 回目の授業を3 回目、4 回目にはかすことができた。授業の流れを体でわかっているため、自信を持って授業に臨むことができた。

〈デメリット及び改善点〉
 授業を行うことに目が行きすぎ、生徒の評価にまで気が回らなかった。
 それぞれの授業の評価を授業者同士で確認し合う時間を作るべきだと感じた。

授業毎に記録を残し、「ローテーション授業」の改善を図った。

〈生徒の声〉

- ・ 先生によって進め方が変わって楽しかった。
- ・ 毎回新鮮な気持ちで取り組むことができた。
- ・ 次の道徳の授業が楽しみになってきた。

<手立て②> トリオ学習の導入

○ 3人グループで話し合う学習指導方法（トリオ学習）を取り入れて授業を実践した。少人数だからこそ生徒は本音を自由に話すことができた。また全体の発表の場面では、生徒同士が相互指名を行っていくことで、より主体的に授業に臨むことができた。



〈先生方の声〉

- ・ 話し合いが活発になり、生徒が主体的に活動していた。
- ・ 普段発言が少ない生徒も3人というグループであるため安心して発言していた。
- ・ 「班の中には〇〇な意見もありました」という発言が増えてきて、多様な意見に触れることができた。
- ・ 他教科等においても自分の考えを伝えようとする意欲の向上が見られ、道徳科とそれ以外の教科との相乗効果を感じた。



〈生徒の声〉

- ・ 意見発表の時に、特定の人が発表することが多かったけれど、トリオ学習によって、みんなが意見を発表してそれを共有することができて良かった。
- ・ 3人のグループ編成なので、緊張せずに話すことができて良かった。
- ・ いろいろな人と会話ができたり、意見が聞けたりして、考えを深めることができた。

＜その他の手立て＞

ア 「道徳コーナー」の設置、「道徳だより」の発行

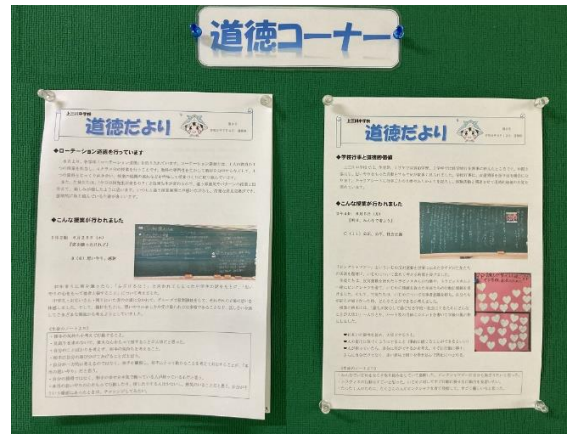
- 各学級に「道徳コーナー」を設置し、道徳だよりや道徳科の授業における生徒のコメントなどを掲示した。
道徳だよりには、道徳的諸価値の解説や、授業の様子、生徒の記述の様子等を記載した。家庭にも配布し、授業の様子を伝える一助とした。

＜先生方の声＞

- ・ 他学級の授業の様子がわかり、とても参考になった。自分の学級でも取り入れてみたい内容が紹介されていた。

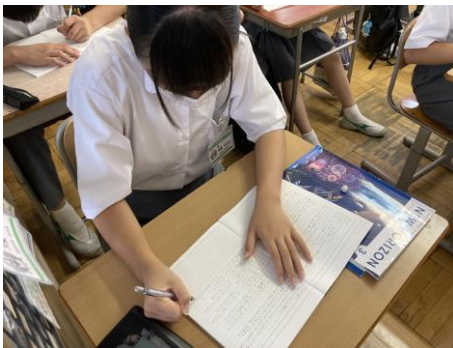
＜保護者の声＞

- ・ 「道徳だより」に載っていた内容について、家庭でも話し合った。学校での授業の様子がわかってよかった。



イ 「考え、議論する道徳」の充実に向けた工夫

- ① 自分の言語化されていない思いや考えを言語化することに慣れるために、言語化ノートを用意し、繰り返し活用した。長文で表現するだけでなく、イメージマップを作成したり、箇条書きで書いたりするなど、生徒の実情に応じて様々な書き方が見られるが、自分の思いを言葉で表現することへの抵抗は確実に小さくなってきている。



＜言語化ノートのルール＞

言語化しよう！《言語化ノート》

表現力を伸ばそう！！

頭の中に浮かんだ気持ちや考えを「言葉にする」＝「言語化する」練習をしよう！

ルール

- とにかくたくさん書く！
- 火・木曜日の朝読の時間に書く
- 3分間書く！（残り時間は続きか読書）
- 専用のノートに文章を書く！
- ていねいに書く必要はない！
- 書く内容はどんなことでもいい！
- ただし、個人名の誹謗中傷は書かない。
- 他人のノートは勝手に見ない。

☆なぜだろう？と自分に質問してみよう

- ② ディスカッション型の学習活動を活性化させるために、「話し合いのルール」「発表の時の話し方」を作成し、道徳科の授業時に黒板に掲示した。意見を一方的に伝えるだけでなく、他者の意見を受けて対話する様子が見られるようになった。



発表の時の話し方

- ・「私は、（～だから）～だと思います。」
- ・同じ意見の場合
「私は～だと思いますが、
班の中では～という意見が出ました。」

・トリオでの発表が終わった後、出ていない意見があった場合は、積極的に発表しよう。

道徳の話し合いのルール

- ① 全員で話し合いに参加する。
- ② 他人の意見も尊重する。
- ③ 聞いていることを態度で示す。
- ④ 話し手は、相手が聞こえやすい声の大きさとスピードで話す。
- ⑤ 脱線 OK

研究課題（3） 地域社会との連携体制の充実

〈手立て③〉 地域教材を生かした授業作り

本校の特色の1つとして、多数の地域の方が学校を支援してくださり、生徒と共に活動していることが挙げられる。そこで、地域の先人や地域人材を教材として取り上げ、身近な人々の生き方や考え方に触れることができる教材の作成を行った。生徒が自分のこととして、郷土を愛する態度や社会の一員としての自覚を高めるのに有効であった。

〈地域の方による学校支援〉



【学校支援ボランティアと一緒に梅の実収穫】

【親父の会による池掃除】

【図書ボランティアによる昇降口飾り付け】

ア 自作教材の活用

◇第1学年 教材名『“折り紙”から“ORIGAMI”へ 創作折り紙作家 吉澤章』

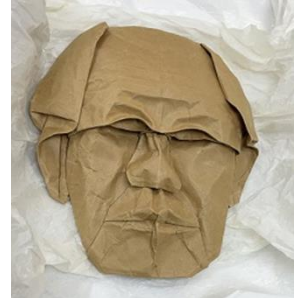
主題名 よりよく生きるには（A-4 希望と勇気 克己と強い意志）

上三川町は、創作折り紙の世界的先駆者である吉澤 章氏の生誕の地である。吉澤氏の生き方を読み物資料として作成し、その努力や強い意志について学ぶ学習を取り入れた。吉澤氏の生き方を通して、目標や希望をもって生きることが日々の生活の充実に繋がることに気付くことができた。



教材開発のため、「吉澤 章 折り紙ギャラリー」を訪問し、吉澤氏の生涯や作品の取材を行った。

収集した情報を基に、読み物教材を作成した。当初「郷土愛」の資料を作成する方向で検討していたが、吉澤氏の力強い生き方から学ぶものが大きいと考え、「努力と強い意志」の教材を作成することとした。



〈吉澤章氏の折り紙による自画像〉

〈生徒の声〉

- ・ 自分の好きなことや、やりたいことは全力で楽しんで、一生の宝物にしたい。
- ・ 吉澤さんのように、高い目標を常にもち続けて、一つのことに全力で取り組みたい。自分のため、人のために尽力したい。
- ・ 私も住んでいる上三川町に少しでも恩返しができる人になりたい。



〈先生方の声〉

- ・ 教材を一から作るのはとても大変だったが、上三川町に住む生徒たちが自分のこととして捉えられるような授業作りに真剣に向き合うことができた。
- ・ 上三川町に関わる人物だから、生徒たちも強い関心をもって授業に取り組んでいた。



イ ゲストティーチャーの活用

◇第2学年

教材名『消防団』（光村図書 きみがいちばんひかるとき）

主題名 社会の一員として地域や社会に関わっていくには（C-12 社会参画 公共の精神）

本教材は、生徒に社会の一員として地域に貢献することについて考えを深めさせる教材である。展開の後半で、町内に在住し地域貢献活動に尽力している方にゲストティーチャーとして話をいただいた。生徒は、社会参画を身近なものとして捉え、関心を高めることができた。

〈生徒の声〉

- ・ 地域や社会のためにできることをやれるようになりたいと思った。
- ・ 他者を思う気持ちが大切だと思った。自分がしてもらった恩を返せる人になりたい。
- ・ やってみたいという素直な気持ちから、少しでも挑戦してみたいと思う。
- ・ とりあえずやってみようという気持ちが、大きな力へと変わっていくのかもしれない。



〈先生方の声〉

- ・ 身近な場所で活躍する人の存在を知ること、授業の内容も自分のこととして考えることができた。
- ・ 自分も地域に貢献することができる、ということを生徒に感じさせることができた。
- ・ 生徒がゲストティーチャーの話に釘付けになっていた。

◇第3学年

教材名『「リクエスト食」を支える』（光村図書 きみがいちばんひかるとき）

主題名 働くことの意義（C-13 勤労）

本教材は、働くことの意味を考え、社会貢献や自身のやりがいといった面に気付かせる教材である。展開の後半で学校支援コーディネーターの話を見学する活動を取り入れた。身近な方の「働く」ことについての考え方に触れることで、より自分の事として「働く」ことの意味を考え、他者や社会に貢献しながら自らの生き方を充実させようとする実践意欲を育てることができた。



〈生徒の声〉

- ・ 収入も大切だけれど、相手の笑顔や喜びを感じ、やりがいを感じていくことが、働き続けるために大切だと思った。
- ・ やりがいや関わる人との関係など、仕事への向き合い方は収入面以外にもたくさんあることが分かった。自分ももっと広い視野で仕事について考えようと思う。
- ・ 役に立ちたい、認められたいという気持ちが働くことの支えになるのかもしれないと思った。

〈先生方の声〉

- ・ 学校ボランティアとして関わってくださっている方の活動や思いを知る機会となった。
- ・ 身近な人々の生き方や考え方をすることで、教材の内容の説得力が増した。



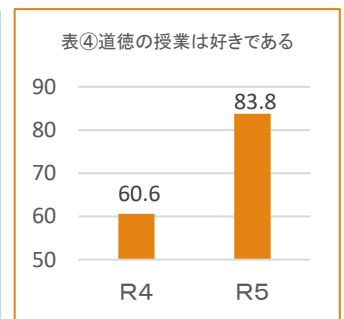
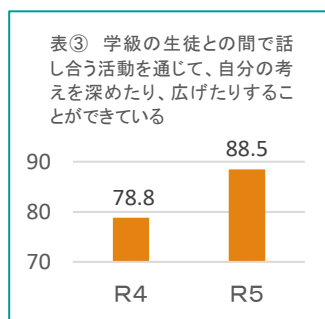
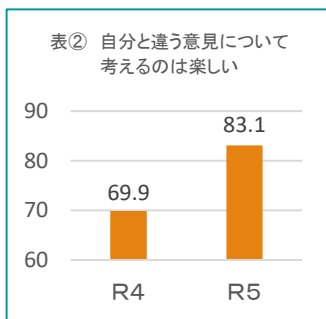
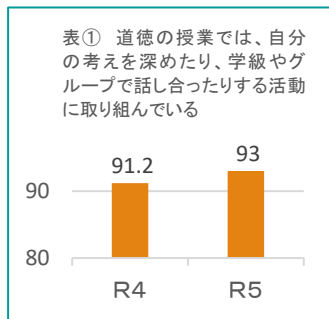
<成果及び課題>

○成果

- ・ 道徳の授業において、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいると感じている生徒は、昨年度と比較し微増であった（表①）。従来から集団の中で自分の意見を述べることについては苦手意識を感じている生徒が多かったが、徐々に話し合いに対する抵抗が減り、自分の考えを述べるのが当たり前と感じる生徒が増えてきているので、今後も継続して取り組んでいく。
- ・ 教職員が交代で学年の学級を回って道徳科の授業を行う取組は、担任以外の教職員も授業者として加わるため、職員室でも道徳科の授業における生徒の変容を話す場面が多くみられるようになった。生徒の良さに目を向ける機会や授業改善を話題にする機会が増えた。また、繰り返し同じ内容を扱うことで教師の授業力の向上にもつながったと考えられる。
- ・ トリオ学習による話し合い活動では、生徒は自分の意見をグループ内で共有してから学級全体で発表することで、自信をもって発言することができた。3人という少人数のグループ編成は意見を交わしやすいため、楽しみながら語り合う姿が見られた（表②）。また、話し合い活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができることを多くの生徒が実感していた（表③）。
- ・ 地域の先人を教材としたり、地域の人材を活用したりすることは、自分の身近なこととして教材を捉えやすく、生徒の学習への意欲の高まりが見られた。道徳科の授業はもとより、他の教科においても地域との関わりについて生徒が主体的に学習に取り組む姿が見られるようになった。
- ・ 「道徳の授業が好きである」との回答が、昨年度と比較し20ポイント以上伸びている（表④）。今回の研究における様々な取組の成果と考えられる。

△課題

- ・ 生徒は、話し合いを進んで行うことができるようになったものの、中心となる道徳的価値の理解を深めるために焦点化した発問や、多面的・多角的に自己を振り返る場の設定のあり方について課題を感じ、研究を継続したいと考えている教員が多かった。



表①～③令和4・5年度全国学力・学習状況調査生徒質問紙回答結果より

表④ 令和4・5年度とちぎっ子学習状況調査生徒質問紙回答結果より

<今後に向けて>

- ・ 「トリオ学習」を継続することで、生徒が自分の意見を述べ、他人の意見を受け止め、互いの意見を比較・検討し、道徳的諸価値について多面的・多角的に考えることができるよう、話し合いの工夫を更に行っていく。
- ・ 「ローテーション授業」の取組を通し、今後も各教員が同じ教材による道徳の授業を複数回行い、生徒の多様な反応や学ぶ姿から、更なる授業改善を図っていく。
- ・ 評価についてさらに研究を進め、生徒の実態をより把握した上で授業を改善していく。
- ・ 今後も、道徳科を要として、全教育活動を通じて本校における道徳教育の充実を図り、地域の特色を生かして「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」工夫を図っていく。

◇学校教育目標

- 【基本目標】豊かな人間性と、自ら学ぶ意欲をもつ、心身ともに健康な子どもを育成する。
 【具体目標】・よく学ぶ子（学びづくり）・思いやりのある子（心づくり）・たくましい子（体づくり）

◇学校の道徳教育の重点目標

- ・ 誠実で明るい心で節度をもって生活し、よりよいめあてに向かって、最後まで努力する態度を育てる。
- ・ 相手の立場に立って考え、互いに助け合い、感謝する心を育てる。
- ・ 生命あるものを尊重し、かけがえのないものとして大切にすることを育てる。

<研究の実際>

◇ 研究を始める前の道徳教育及び道徳科の授業の現状と課題等

- ・ 道徳教育の充実を図るためには学校の教育活動の他にも家庭や地域との連携が重要であるが、具体的・継続的な取り組みには至っていない。
- ・ 「考え、議論する道徳」の授業実践を要として、児童が主体的に他者と関わりながら、自分の意見を伝えたり、相手の意見を聞いたりすることで、考えを多面的・多角的に広げたり深めたりすることができる教育活動を推進していく必要がある。



◇研究の視点

【視点1】学校の教育課題を踏まえた道徳教育の内容の重点化

- ・ 伝え合う力、関わる力を育む道徳教育
- ・ 共感する力や思いやりの心、協力し合う態度を育て、集団や社会の一員としての自覚と責任を育む道徳教育
- ・ 道徳教育全体計画及び別葉の作成・計画的な活用の工夫

【視点2】道徳科の指導の創意工夫

- ・ 「考え、議論する道徳」の授業展開の工夫
- ・ 児童の実態の把握や道徳科における評価を生かした指導の工夫

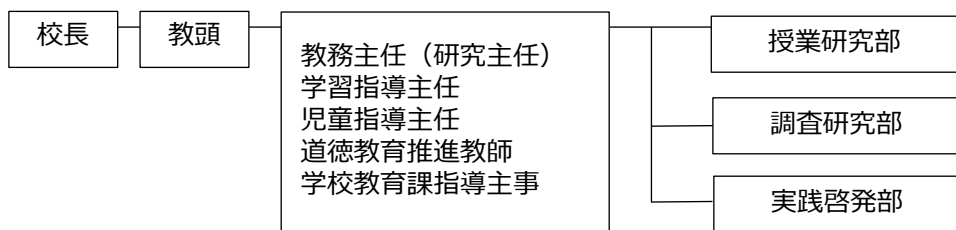
【視点3】指導体制や異校種、家庭、地域社会等との連携体制の充実

- ・ 外部講師による道徳教育研修の充実
- ・ 町小中一貫教育「道徳教育部会」との連携
- ・ 家庭（保護者）や地域社会との連携による特色ある道徳教育の在り方や地域教材の作成等

◇組織体制

【関係諸機関】

- ・ 文部科学省
- ・ 栃木県教育委員会
- ・ 高根沢町教育委員会
- ・ 高根沢町小中一貫教育「道徳教育部会」
- ・ 外部講師等



◇主な研究の経過

- 5月：道徳研究ロードマップ作成
- 6月：学校課題研修（指導案の形式等）
道徳研修①（外部講師による提案授業、授業研修会）
- 8月：道徳研修会の参加
学校課題研究（授業事前検討会）
- 9月：道徳研修②（研究授業、外部講師による授業研修会）
町小中一貫教育「道徳教育部会」
- 11月：町小中一貫教育「道徳教育部会」
町版道徳に関する保護者アンケートの作成
- 12月：道徳研修③（研究授業、外部講師による授業研修会）
町小中一貫教育道徳部委員の授業参観、研修会への参加
- 1月：道徳研修④（外部講師による提案授業、授業研修会）

- ・ 外部講師を招聘し、年4回の研修会を実施した。また、町小中一貫教育「道徳教育部会」と連携を図りながら研究を進めた。
【研修会のねらい】
- ・ 講師の授業を参観し、発問の意図、板書の仕方を知る。
- ・ 授業について研究討議し、よりよい授業づくりについて検討する。
- ・ 講師の授業を参観し、これまでの授業づくりを振り返るとともに、今後の授業や研究に生かす。

<効果的だった取組等>

【視点1】「学校の教育課題を踏まえた道徳教育の内容の重点化」

- 学校の教育目標である「豊かな人間性と、自ら学ぶ意欲をもつ、心身ともに健康な子どもを育成する」を目指し、道徳科の授業においては内容項目「B 主として人との関わりに関すること」の指導研究を重点的に推進した。

(1) 伝え合う力、関わる力を育む道徳教育

ア 自分の思いや考えを伝える基礎的・基本的な力の育成と学びを他教科や日常生活に生かす場の設定

【基礎的・基本的な力の育成】

- ・ 音読 ・ 話型の提示 ・ 短文作り ・ 日記（絵日記）の推奨
- ・ ICTの活用 等

【学びを他教科や生活に生かす場の設定】



イ 人権週間に係る取組

- ・ 高根沢町人権擁護委員会と連携して人権教室を実施し、いじめに関する講演会を行った。
- ・ 友達のよいところを見つけて伝え合う「ありがとうカード」の活動を行った。ピンクのカードが児童から、白のカードが教職員からのコメントである。同学年の児童はもちろん、異学年からのカードの交流も多くみられた。

〈児童の様子〉

- ・ 同学年の友達からだけでなく、下級生や上級生からもたくさんのありがとうカードが寄せられ、コメントをもらった児童はとてもうれしそうにしていた。
- ・ 同学年の友達や異学年の児童の「よさ」に目を向け、ありがとうの気持ちを伝えることで、互いに認め合い思いやりや感謝の気持ちをもって関わる事ができた。



【視点2】道徳科の指導の創意工夫

- 本研究においては「考え、議論する道徳」の授業実践を目指した授業展開の工夫や、児童が他者と関わりながら自分の考えを広げたり深めたりできる授業形態の工夫などを図った。

(1) 「考え、議論する道徳」の授業展開の工夫

ア 多面的・多角的に考えさせるための手立ての工夫

- ・ 白鷗大学中山和彦講師の研修会を通し、まずは「多面的」と「多角的」のイメージの共有化を図った。次に、多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深めるための学習の手立てとして、「対象軸の視点移動」、「時間軸の視点移動」、「条件軸の視点移動」、「本質軸の視点移動」という4つの思考軸の視点移動を意識した授業展開について学んだ。



イ 主体的に他者と関わりあうことができる学習形態の工夫

- ・ ペアや3人グループでの活動など、授業や活動のねらいに応じた多様な学習形態を取り入れることで、自分の考えを表出する機会を確保した。また、自他の考えの共通点や相違点に気付くことによって、道徳的な問題意識を喚起して主体的に学習に取り組むことができるための学習形態の工夫を図った。



<成果及び課題>

○成果

- ・ 白鷗大学の中山和彦先生を講師に招いた研修会では、「B主として人との関わりに関すること」に焦点を絞り研究授業を実施し、授業の改善だけでなく、児童の日常生活での人間関係を重視する意識を高めることができた。
- ・ 多面的・多角的に考えを広げたり深めたりするための手立てとして、多様な学習形態を工夫することができた。また、登場人物の心情を視覚的に捉えたり、多様な意見を表出させたりするための構造的な板書を意識することができた。
- ・ 年間を通して意図的・計画的に研究授業の機会を設けたことによって、教職員が互いに道徳の授業を参観したり、意見を交わしたりする機会が生まれ、指導の幅を広げることができた。
- ・ 町小中一貫教育「道徳教育部会」と連携し、保護者アンケートを作成した。アンケート調査を行うことで保護者の思いを把握することができ、道徳教育全体計画の見直しを図る上で有効であった。また、授業研究会に道徳教育部会の先生方が参加することにより、活発な意見交換が行われ、協議会が充実した。
- ・ PTA総会や学校運営協議会などで本事業について説明したり、学校のHPや道徳だよりを通して保護者や地域住民への道徳教育の周知・啓発を図ったりすることができた。

△課題

- ・ 学校の教育活動全体を通して、友達、家族、地域の方々など様々な立場の方と関わりをもち、相手の思いや考え方に触れることで児童の心が豊かに育っていくよう、年間指導計画を設定することが必要である。
- ・ 内容項目や授業のねらいなどに応じて多様な授業展開の工夫が図られるとともに、児童の問題意識に沿った柔軟な学習過程や発問の工夫についての研究を進めることが必要である。
- ・ 授業の中で、児童に道徳的価値について深く考えさせることができず、表面的な捉えにとどまってしまうことが多かった。そこで、今後は児童が道徳的価値を自分との関わりで考え、深めるための手立ての研究を一層進める必要がある。また、自分の事として考え、実生活に学びを生かそうとする態度を育てるための授業展開の工夫も求められる。

<今後に向けて>

- ・ 次年度の研修会についても、明確なねらいをもって意図的・計画的に研修内容を設定していくことが重要である。特に、「考え、議論する道徳」授業づくりを進めるにあたっては、クラスや児童の実態を十分に把握した上で発問を吟味し、実際の授業で使う「言葉」を明確にしておくことや、適切な問い返しを可能にするために予め児童の発言を具体的に想定して授業検討を重ねることが必要である。
- ・ 地域との連携・協働が充実している中央小学校の強みを生かした道徳教育の更なる充実が求められる。そのために、学校支援ボランティアとの関わりを授業での学びと関連付けたり、ゲストティーチャーとして授業に招いたりするなど、多様な連携・協働の機会を設定する必要がある。

栃木県教育委員会事務局義務教育課
〒320-8501 宇都宮市埴田1-1-20
TEL : 028-623-3392 FAX : 028-623-3399

「教える道徳教育」ホームページ
<http://www.pref.tochigi.lg.jp/m03/education/gakkoukyouiku/shouchuu/doutoku.html>

